

# 十六日

宮沢賢治

青空文庫



よく晴れて前の谷川もいつもとまるでちがって楽しくごろごろ鳴った。盆ぼんの十六日なので鉋こうざん山も休んで給きゅうりょう料りょうは呉くれ畑はたけの仕し事ごとも一段落いちだんらくついて今日こそ一日そこらの木やとうもろこしを吹ふく風も家のなかの煙けむりに射さす青い光ほうの棒ぼうもみんな二人のものだった。おみちは朝から畑にあるもので食べられるものを集あつめていろいろに取り合とせてみた。嘉吉かきちは朝いつもの時刻じこくに眼めをさましてから寝ねそべったまま煙草たばこを二、三服ぶくふかしてまたすうすう眠ねむってしまつた。

この一年に二日しかない恐おそらくは太陽たいようからも許ゆるされそうな休ひみの日を外では鳥はりが針はりのように啼なき日光がしんしんと降ふった。嘉

吉がもうひる近いからと起おこされたのはもう十一時近くであつた。

おみちは餅もちの三いろ、あんのと枝えだ豆まめをすつてくるんだのと汁しる

のを拵こしらへてしまつて膳ぜんの支度したくもして待まつていた。嘉吉は楊子ようじを

くわいて峠とうげへのみちをよこぎつて川かわにおいて行つた。それは白と

鼠ねずみいろの縞しまのある大理石だいりせきで上じやうりゆう流りゆうに家のないそのきれいな流なが

れがざあざあ云いつたりごぼごぼ湧わいたりした。嘉吉かきちはすぐ川かわ下しも

に見える鉾こうざん山さんの方かたを見た。鉾山こうざんも今日はひつそりして鉄てつ索さくも

うごいていず青あおぞらにうすくけむつていた。嘉吉はせいせいして

それでもまだどこかに溶とけけない熱あついかたまりがあるように思おもいな

がら小屋こやへ歸かへつて来た。嘉吉は鉾山こうざんの坑こうぼく木かの係かかりではもう頭かしら

株かぶだつた。それに前は小林区しょうりんくの現場げんば監督かんとくもしていたので木

のことではいちばん明るかった。そして冬撰せんこう 鉦ちようしへ来ていたこの  
 村むすめの娘のおみちと出来てからとうとうその一本調子ちようしで親たちを  
 納な得とくさせておみちを貰もらつてしまった。親たちは鉦山から少し離はな  
 れてはいたけれどもじぶんの栗くりの畑はたけもわずかの山林もくつついて  
 いるいまのところとうもろこしに小屋をたててやった。そしておみちはそのわ  
 ずかの畑えだまめに玉蜀黍えだまめや枝豆うやささげも植うえたけれども大抵たいていは  
 嘉吉こを出してやつてから実家じっかへ手伝てつだいに行つた。そうしてまだ子  
 供どもがなく三年経たつた。

嘉吉は小屋へ入つた。

(お前まめさま今夜もちほうのきささくらさ仏ほとけさんおが拜おがみさ行ぎぐべ。) おみちが膳ぜんの  
 上まめに豆もちの餅もちの皿さらを置おきながら云いつた。(うん、うな行ぎつただがら

今年あいいだないがべが。嘉吉が云つた。

（そだら踊りさでも出はるますか。）俄かにぱつと顔をほてらせながらおみちは云つた。（ふん見さ行くべき。）嘉吉はすこしわらつて云つた。膳ができた。いくつもの峠を越えて海藻の「数字空白」を着せた馬に運ばれて来たてんぐさも四角に切られて臃ろにひかつた。嘉吉は子供のよう<sup>はし</sup>に箸をとりはじめた。

ふと表の河岸でカーンカーンと岩を叩く音がした。二人はぎよつとして聞き耳をたてた。

音はなくなつた。（今頃探鉱など来るはずあないな。）嘉吉は豆の餅を口に入れた。音がこちこちまた起つた。

（この餅拵えるのは仙台領ばかりだもな。）嘉吉はもうそつ

ちを考えるのをやめて話しかけた。(はあ。) おみちはけれども  
 気の無なさそうに返事へんじしてまだおもての音を気にしていた。

(今こんにち日はちよつとお訪たずねいたしますが。) 門口かどぐちで若い水わか々しい  
 声が云いった。(はあい。) 嘉吉は用があつたからこつちへ廻まわれと  
 いった風で口をもぐもぐしながら云った。けれどもその眼めはじつ  
 とおみちを見ていた。

(あつ、こつちですか。今日は。ご飯はんちゆう中ちゆうをどうも失敬しつがいしま  
 した。ちよつとお尋たずねしますが、この上じゆうりゆう流りゆうに水車すいしやがありまし  
 ようか。) 若いわかかばんを持つて鉄槌かなづちをさげた学生がくせいだった。(さ  
 あ、お前まへさんどこから来なすつた。) 嘉吉は少しむかつぱらをた  
 てたように云った。

(仙<sup>せん</sup>台<sup>だい</sup>の大学のもんですがね。地図にはこの家がなく水車があるんです。)(ははあ。)(嘉<sup>か</sup>吉<sup>きち</sup>は馬<sup>ば</sup>鹿<sup>か</sup>にしたように云<sup>い</sup>つた。青年はすつかり照<sup>て</sup>れてしまった。

(まあ地図をお見せなさい。お掛<sup>か</sup>けなさい。)(嘉<sup>か</sup>吉<sup>きち</sup>は自分も前<sup>し</sup>林<sup>よう</sup>区<sup>りん</sup>に居<sup>い</sup>たので地図は明<sup>あ</sup>るかつた。学生は地図を渡<sup>わた</sup>しながら云<sup>い</sup>われた通りしきいに腰<sup>こし</sup>掛<sup>か</sup>けてしまった。おみちはすぐ台<sup>だい</sup>所<sup>どころ</sup>の方<sup>かた</sup>へ立<sup>た</sup>つて行<sup>い</sup>つて手<sup>て</sup>早<sup>はや</sup>く餅<sup>もち</sup>や海<sup>かい</sup>藻<sup>そう</sup>とさ<sup>さ</sup>げを煮<sup>に</sup>た膳<sup>ぜん</sup>をこしらえて来<sup>き</sup>て、

(おあがなんんえ)と云<sup>い</sup>つた。

(こいつあ水<sup>みづ</sup>車<sup>ぐるま</sup>じゃありませんや。前<sup>まへ</sup>じきそこにあ<sup>あ</sup>つたんですが掛<sup>か</sup>けて金<sup>きん</sup>山<sup>さん</sup>の精<sup>せい</sup>錬<sup>れん</sup>所<sup>じょ</sup>でさ。)(ああ、金<sup>きん</sup>鉞<sup>こう</sup>を搗<sup>つ</sup>くあいつですね



。)(ええ、そう、そう、水車つて云えば水車でさあ。ただ粟あわや稗ひえを搗こくんでない金を搗こくだけで。)(そしてお家はまだ建たたなかつたんですね、いやお食しょくじ事のところをお邪魔じやましました。ありがとうございました。)

学生は立とうとした。嘉吉はおみちの前でもう少してきばき話をつづけたかつたし、学生がすこしもこつちを悪わるく受うけないのが気に入つてあわてて云つた。(まあ、ひとつおつき合あいなさい。ここらは今日ほん盆ぼんの十六日きやくでこうして遊あそんでいるんです。かかあもせつ角拵かくぎえたのお客きやくさんに食くべていただかないと恥はじかきますから。)(おあがんなんえ。)(おみちも低ひくく云つた。

学生はしばらく立たつていたが決けっしん心しんしたように腰こしをおろした。

(そいじや頂きますよ。)(はっは、なあに、ここらのご馳走で  
ばこつたなもんで。そうするどあなだは大学では何のほうで。)  
(地質です。もうからない仕事で。)(餅を噛み切つて呑み下して  
また云つた。(化石をさがしに来たんです。)(化石も嘉吉は知つ  
ていた。(そこの岩にありしたか。)(ええ海百合です。外でも  
とりました。この岩はまだ上流にも二、三ヶ所出ていましよ  
うね。)(はあはあ、出てます出てます。)(学生は何でももう早  
く餅をげろ呑みにして早く生きたいようにも見えまたやっぱり疲  
れてもいればこういう款待に温さを感<sup>かん</sup>じてまだ止まっていたい  
ようにも見えた。

(今日はそうせばどこまで。)(ええ、峠まで行つて引つ返し

て来て 県道<sup>けんどう</sup>を 大船渡<sup>おおふなと</sup>へ出ようと 思います。

(今晚<sup>こんばん</sup>のお泊り<sup>とま</sup>は。)(姥石<sup>うばいし</sup>まで行けましょうか。)(はあ、

ゆつくりでgoあんす。)(いや、どうも失礼<sup>しつれい</sup>しました。ほんと

うにいろいろご馳走<sup>ちそう</sup>になつて、これはほんの少しですが。)(学生

は靴<sup>かばん</sup>から敷島<sup>しきしま</sup>を一つとキヤラメルの小さな箱<sup>はこ</sup>を出して置いた。

(なあにす、そたなごとお前<sup>まへ</sup>さん。)(おみちは顔を赤くしてそれ

を押<sup>お</sup>し戻<sup>もど</sup>した。

(もうほんの。)(学生はさつきと出て行つた。(なあんだ。あと

姥石<sup>うばいし</sup>まで煙草<sup>たばこ</sup>売るとこないも。ぼかげで置<sup>お</sup>いで来<sup>こ</sup>。)(おみちは急

いで草履<sup>ぞうり</sup>をつつかけて出たけれども間もなく戻つて来た。(脚<sup>あし</sup>早

くて。とつても。)(若<sup>わか</sup>いがら律儀<sup>りちぎ</sup>だもな。)(嘉吉<sup>かきち</sup>はまたゆつく

りくつろいでうすぐろいてんを砕くだいて醬油しょうゆにつけて食たつた。

おみちは娘むすめのような顔いろでまだぼんやりしたように座すわつていた。それは嘉吉がおみちを知しつてからわずかに二度どだけ見た表ひょう情じょうであつた。

(おらにもああいう若いづぎあつたんだがな、ああいう面白おもしろい目見る暇ひまないがつたもな。) 嘉吉が云いつた。

(あん。) おみちはまだぼんやりして何か考かんえていた。

嘉吉はかつとなつた。

(じやい、はきはきど返事へんじせじや。何なにであ、あたな人形にんぎょうこさ奴やつさあすぐにほれやがて。)

(何なに云いうべこの人ひとあ。) おみちはさあつと青あおじろくなくなつてまた赤あか

くなつた。

(ええ糞くそそのつら付つき。見だぐない。どこさでもけづがれ。びつき  
 ) 嘉吉はまるで落ちはじめたなだれのように膳ぜんを向うへけ飛とば  
 した。おみちはとうとうつぶせになつて声をあげて泣なき出した。  
 (何なんだい。あつたな雨降ふれば無なくなるような奴ひとつこぼだ 凧こさ、食くえ  
 の申し訳わけげないの機嫌きげん取りやがて。) 嘉吉はまたそう云つたけれ  
 どもすこしもそれに逆さかうでもなくただ辛つらそうにしくしく泣いてい  
 るおみちのよごれた小倉こくらの黒いえりや顫ふるうせなかを見ていると二  
 人とも何年ぶりかのただの子供こどもになつてこの一日をままごとのよ  
 うにして遊あそんでいたのをめちやめちやにこわしてしまつたよう  
 からだが風と青い寒かん天てんでごちやごちやにされたような情なさけない気

がした。

（おみち何であその年してでわらすみだいに。起ぎろつたら。起ぎで片付けろつたら。）

おみちは泣きじやくりながら起きあがった。そしてじぶんはまだろくに食べもしなかつた膳を片付けはじめた。

嘉吉はマツチをすつてたばこを二つ三つのんだ。それから横か  
らじつとおみちを見るとまだ泣きたいのを無理にこらえて口をび  
くびくしながらぼんやり眼を赤くしているのが酔つた狸のように  
でも見えた。嘉吉は矢もたてもたまらず俄かにおみちが可哀そう  
になつてきた。

嘉吉はじつと考えた。おみちがさつきあの顔いろはこつちの

邪推じやすいかもしれない。

及びおよもしないあんな男をいきなり一言二言ひとことはなしてそんなことを考えるなんてあることでない。そうだとするとおれがあんな大学生とでも引け目なしにぱりぱり談はなした。そのおれの力を感かんじていたのかも知れない。それにおれには鉞夫ことうふどもにさえ馬鹿ばかにはされない肩かたや腕うでの力がある。あんなひよろひよろした若造わかぞうにくらべては何と云いつてもおみちにはおれのほうが勝かち目めがある。

(おみち、ちよつとこさ来こ。) 嘉吉かきちが云いつた。

おみちはだまつて来て首くびを垂たれて座すわつた。

(うなまるで冗じょうだん談だんづごと判わがらないで面おもしろくがないもな。盆ぼんの十六日あそあ遊あそばないばつまらない。おれ云いつたなみんなうそさ。な。

それでもああいうきれいな男うなだて好きだべ。(好かない。)  
おみちが甘えるあまように云った。

(好きだつて云つたらおれごしやぐど思うが。そのくらいなこと  
云つてごしやぐのような水臭みずくさいおらだないな。誰だれだつてきれいな  
ものすぎさな。おれだつて伊手いででもいいあねこ見ればその話だ  
てするさ。あのあんこだて好きだべ。好きだて云え。こう云うご  
とほんと云うごそ実じつああるづもんだ。な。好きだべ。) おみちは  
子供こどものようになずいた。嘉吉はまだくしやくしや泣ないておどけ  
たような顔をしたおみちを抱だいてこつそり耳へささやいた。(そ  
だがらさ、あのあんこ肴さかなにして今日あ遊ぶべじやい。いいが。お  
れあのあんこうなさ取り持とづ。大丈夫だいじょうぶだでばよ。おれこれから



出掛でかげて峠とうげさ行くまでに行きあつて今夜の踊り見るべしすすめるがらよ、なあにどごまで行がないやないようだないがけな。そして踊り済すまつてがら家さ連れつで来ておれ実家じっかさ行とつて泊とまつて来るがらうなこつちで泣いて頼たのんでみなよ。おれの妹だつて云えばいいがらよ。そしてさ出来ればよ、うなも町さ出はてもうんとい女子むすめだづごとともわがら。）

おみちの胸むねはこの悪魔あくまのささやきにどかどか鳴つた。それからいきなり嘉吉かきちをとび退のいて、

（何云うべ、この人あ、人ばがにして。）そして爽さわかに笑わらつた。嘉吉もごろりと寝ねそべつて天てん井じょうを見ながら何べんも笑つた。

そこでおみちははじめて晴れ晴れじぶんの拵こしらえた寒かん天てんもたべた。

餅<sup>もち</sup>もたべた。キャラメル<sup>はこ</sup>の箱と敷<sup>しき</sup>島<sup>しま</sup>は秋らしい日光のなかにし  
ずかに横<sup>よこ</sup>わった。

# 青空文庫情報

底本：「ポラーノの広場」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年6月25日初版発行

底本の親本：「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年5月

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2009年8月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

w.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 十六日

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>